

特 集 No. 4

本×まちづくり

～知る つながる 気軽に交流できる
まちづくりの新しいカタチ～

浅野 健

知識をつけるための本

本を読む、この行為は知識をつけるための基本的な行為である。本ができるまでには、著者が原稿を書き、出版社が細かく字句をチェックし、レイアウトも行い、装丁されるなどの工程で何人もの目や手を経ており、信頼できる出版物として世に出ている。

十代の頃は特に本が好きだったわけではないが、学生時代の論文執筆のため、社会人になってからもリサーチのために図書館に通うようになり、気が付けば自宅でも職場でも当たり前のように本を手取るようになり、本が暮らしの一部になっていた。

人と人をつなぐ本の力

本の役割と言えば、前述したように「知識をつける」ことが考えられるが、



円頓寺商店街で2021年10月に行われた、フリーマーケット形式のブックイベント「円頓寺本のさんぽみち」

個人的には最近、本が持つ「人と人をつなげる」という役割に注目している。各地の公立図書館を視察すると、子ども向けの読み聞かせ会、中高生向けのヤングアダルトコーナー、ビジネスコーナーやビジネス向け講座、地元の名史講座など工夫を凝らした活動やコーナーを設ける図書館が増えており、本を通じた学びの場であるとともに利用者同士の交流も生まれ、様々な世代的サードプレイスとなっている。

民間に目を向けると、カフェ併設の書店が増えたり、お寺には寺院建築や仏教にまつわる本、旅館には旅にまつわる本、病院には体のことに関する本とといったようにその施設にまつわる本を集めたコーナーを併設するケースが各地で展開されたりしている。さらに古本市などのイベントも各地



柴田商店街の空き店舗を活用した多世代交流スペース「シバテーブル」内の「ここにもライブラリー」

で行われている。このように常設やイベントなど様々な形態で本が人と人をつなげる役割を果たしている。

「ここにもライブラリー事業」について

ここで、名古屋市長立図書館のユニークな取り組みとして、「ここにもライブラリー事業」を紹介する。名古屋市長立図書館は、中央館一館、分館(区・支所)二十一館で市内ネットワークを形成しているが、より身近な場所でも図書館の本と出合えるようにするため、店舗や児童館といった図書館以外の場所に「ここにもライブラリー」を設置し、その場所の事業者にライブラリーの運営も委ねる。二〇二一年五月に市内三か所目、商店街で初のケースとして、南区柴田商店街の「シバテーブル」内にオープンした。また、同年十

月から十一月の期間限定の試みとして、笠寺観音商店街の道路空間を使った社会実験でも「ここにもライブラリー」が出現した。この他にも、自動車図書館二台で市内全十六区を巡回しており、より多くの市民に本との出会いの機会を提供している。

コモンズとしての本×まちづくり

今回の特集テーマであるコモンズの点からみると、公立図書館や民間の図書コーナーは、空間自体がコモンズであるとともに、貸し出しをする「本」も共有財産であることからコモンズと捉えることができる。共有財産としての本を使って街なかに交流スペースを創出するなど、気軽な仕掛けとして本×まちづくりの可能性に今後も注目していきたい。



笠寺道くさ社会実験で設置された book ワゴンを使って「ここにもライブラリー」が出現